

十一 アカウミガメと子どもたち

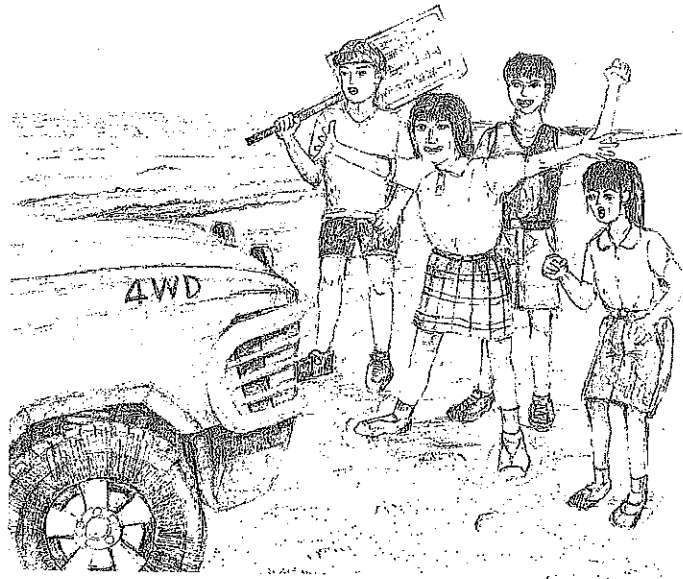
隆志はウキウキしていた。夏休みになったのだ。今夜は気の合った仲間たちとお倉ヶ浜で釣りをするのだ。そして花火だ。中学校生活最後の夏だ。勉強のことは、今の隆志の頭には、まったくくない。とにかく楽しみたい。仲間も同じ気持ちだった。

「君たちは中学生？」防潮堤で打ち上げ花火を楽しむ隆志たちの所へ、懐中電灯を照らしながら、その男性はやって来た。最初、補導員かと思ったその初老の男性は、やれ保護者はどうしたとか、何時までに帰れとか、厳しく言わずに浜に降りていった。自分たちのささやかなパーティーの気分を壊されずにすんで、隆志はホッとしていた。また花火をと思ったところに、「ちよつと浜に降りてきなさい。」さっきの男性の声だ。少し強い調子になっている。嫌な予感を抱いて隆志たちは砂浜に降りて行った。「君たちはここの標識を見なかったのか？コアジサシが卵を産んでいるって書いてあつただろ！」

この人が、お倉ヶ浜の自然環境を守る調査員だとか、コアジサシが夏、飛来してきて卵を産むとか、隆志には、そんなことはどうでもよかった。そして、たった五個くらいの卵を割ったからといって、なぜこの人はこんなにも自分たちを叱るのか、隆志にはわからなかったし、ウキウキした夏休みの夜を台なしにしてしまったコアジサシの卵が恨めしかった。

それから数日して、隆志は釣りに出かけた。お倉ヶ浜では地引き網をしていた。人手が少ないのか小学生も十人

程度混じっていた。子どもたちの元気で明るい声が、こちらまで響いてくる。小学生は気楽でいいな。夏休みになつて、まだ勉強には、いつさい手をつけていない自分のことはさておいて、隆志はそんなことを考えながら釣り糸を垂れていた。



「砂浜を車で走らないでください。」

突然の叫びだ。見ると地引き網をしていた小学生たちが、手を大きく振りながら四輪駆動車よんりんくどうしゃの方に向かって走っている。悲鳴にも似た必死の叫び声をあげながら子どもたちは車を止めた。隆志は釣るのを止めて、その様子を見ていた。子どもたちは身ぶりを加えながら何かを訴えている。すると、地引き網を引いていた人たちの中から、一人の男性が車に近づいてきた。あの入だ。あの時の調査員のおじさんだ。隆志は嫌な気分になった。しかし、必死になって車を止めた子どもたちのことが気になるのか、足は四輪駆動車の方に向かっていった。

「この砂浜にはアカウミガメの卵が埋まっているんです。私たちはアカウミガメが波打ち際近くで産卵した時は、その卵を掘り出して浜辺の奥の方に移動させているんです。それから、『ここにはアカウミガメの卵があります。この上を通つてはいけません。お願いします。』って書いた標識を立てているんです。どうか、この砂浜で車を走らせなくて下さい。お願いします。」

子どもたちは何度も何度も頭を下げて頼んでいた。四輪駆動車は波打ち際の固いところを選んで帰っていった。

子どもたちは飛び上がって喜んでいて。あのおじさんに飛びついて、はしゃいでいる子どももいた。

「気楽でいいな」と、ちよつと大人ぶつてこの子たちを眺めていた自分の方が、なにも知らない、なにも考えていない子どもに思えた。

「君はこないだの？」おじさんが話しかけてきた。隆志のことを覚えていたのだ。あの晩の険しい瞳ひとみはそこにはなく、人を温かく包み込むような眼差しまなざしが隆志に向けられていた。

彼の名前は藤田さん。いろんなことを話してくれた。

「アカウミガメはともデリケートでね。産卵しようとする砂浜を、何日も前から沖の方から眺めているんだ。よし、ぼちぼちいいかなつて砂浜までやって来ても、ちよつとしたことで沖に引き返すんだよ。上陸するウミガメの数が年々少なくなつてきているのは、砂浜の減少も原因といわれているが、人間が原因になっていることが多いんだよ。なぜかといえば、毎晩のように四輪駆動車が砂浜を走り回ったり、夏には若者たちが花火をしに次から次やって来て、それが夜明け近くまで続いたりするからなんだよ。」

花火？ 藤田さんはこの前の晩、花火をしている自分たちを叱ったりはしなかった。

「この砂浜で孵化ふかした子ガメたちが、三十キロ沖まで必死になつて泳いで黒潮にのる。一年後にはアメリカに着く。そして、それから二年かけて、つまり三年後この砂浜に大人になつて帰ってくる。しかし、子ガメから大人のカメになれるのは千匹に一匹いるかいないかなんだ。いつも命がけなんだよ。卵を生むチャンスがうかがつて海面すれすれを泳いでいるカメが漁船とぶつかりスクリーンスクリーンに巻き込まれて死ぬことも、よくあるんだよ。」

隆志は三年かけて帰ってきたウミガメを想像した。漁船にぶつかって、あっけなく死んでしまうなんてあんまりだ、とも思った。

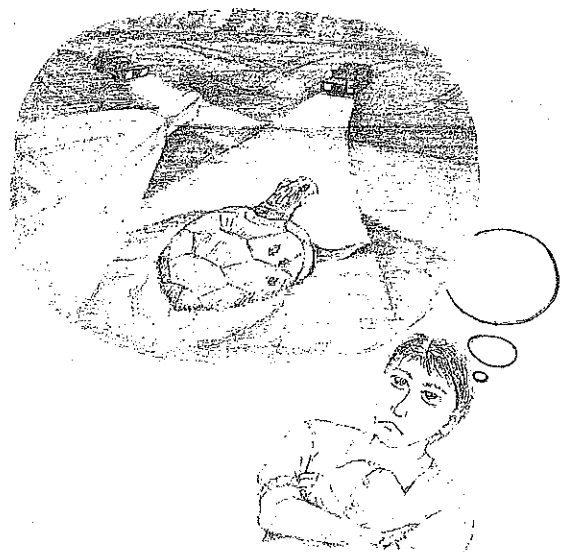
「アカウミガメは雑食性でね、なんでも食べるんだ。魚・カニ・海藻そしてクラゲ。海岸近くはビニールや発泡スチロールなどが浮かんでいるだろ。クラゲと間違えるのか、よく食べてしまうんだよ。この海岸でも死んだアカウミガメが打ち上げられることがよくあるけど、その多くはビニールなんかを、のどに詰まらせていたりするんだ。せつかく卵を産むためにこの海岸に帰ってきたのに、産む前に死んでしまったりするんだ。」

釣りをしていて、ついパンの袋が風に飛んだりしても、まあいいやと思っていた自分を思い出す隆志だった。

「やっこの思いで卵を生むんだ。近ごろカメたちは波打ち際の近くで卵を産むのが多くなった。卵は水にぬれたら孵化しないんだ。以前は浜辺の草原までやって来ていたんだが、四輪駆動車や花火がこわいんだらうね。」

隆志には藤田さんの顔が寂しそうに見えた。

「若者たちは自分たちの面白半分の蛇行運転が、多くの命を奪っていることも知らずに、いまが楽しければいいって感じて車を走らせにこの浜に来る。アカウミガメは車の明かりや花火がこわくて、波打ち際までしか上がれずやっこの思いで卵を産むんだ。そんなアカウミガメのことを知っているから、あの子たちは卵を守ろうと、安全な場所まで移動させているんだよ、私と一緒にね。だから、あんなに必死になつて車を止めたんだよ。」



いつのまにか子どもたちも藤田さんのところに集まって、彼の話を熱心に聞いていた。みんな、そうだそうだっていうように、大きくうなずいている。

アカウミガメ保護を呼びかけて設置した六枚の看板が一週間後に壊された話。アカウミガメの卵の位置を知らせる標識をキャンプの薪用たきぎに抜いてしまった話。面白半分にコアジサシの卵を割ってしまった高校生の話。隆志は藤田さんと目を合わせることができずに、うつむいたまま、それらの話を聞いていた。「浜に来るなど言えないし……。」

隆志は、藤田さんの注意をうわの空で聞いていた数日前の自分を思い出していた。

「お兄ちゃん、子ガメ見たことがある？」

子どもたちが、目を輝かせながら隆志に聞いた。

「いや、ないよ。」

恥ずかしそうに隆志は答えた。

「もう、たまらなくかわいいんだよ。手のひらに乗せると前足をこ
ういう感じで必死になって動かすんだよ。」

子どもたちは、いつせいに腕をくるくる回して見せた。

隆志には、この子たちが、たまらなくたまらなく可愛く見えた。

